

月経困難症に対するクロールプロマジン 及びトランキライザーの使用経験

東京女子医科大学産婦人科学教室 (主任 柚木祥三郎教授)

岩崎 初美・吉岡 晴子
イワ サキ ハツ ミ ヨシ オカ ハル ヒコ

寺田 百合子・牧田 燐子
テラ ダ ユ リ コ マキ タ ヨウ コ

(受付 昭和33年12月12日)

緒言

最近各科領域において、クロールプロマジン及びトランキライザーが広範囲に使用され、鎮痛鎮静作用、精神的緊張および不安の除去に、かなり良好な成績を挙げている。婦人科領域においては、強化麻酔、術後及び分娩時疼痛除去、妊娠悪阻、更年期障害等に用いられ、その効果について多数の報告をみているが、月経時疼痛に対する報告例は少いようである。当教室において本校学生を対象として、月経時疼痛に、クロールプロマジン及びトランキライザーを使用してその効果を観察したので、報告する。

調査対象および方法

まず東京女子医科大学学生245名に問診し、月経時疼痛を有する87名、35.5%を選出し、これを観察対象とした。

クロールプロマジンは吉富製薬のコントミン錠1錠12.5mgを使用した。

月経時疼痛を有する者全員にコントミン錠であることおよび月経時疼痛に対する薬効はなお不明であることを明示して2錠ずつを分配し、疼痛時適宜にまず1錠を服用せしめ、その効果のないときはさらに1錠を服用するように指示した。

トランキライザーは第一製薬のアトラキシン錠1錠0.2gを使用した。

87名の観察者のうち疼痛の程度によって大約2群に分類し、疼痛のひどい者には4錠を、比較的弱い者には2錠をアトラキシンと明示し、かつ効果不明の点を

明らかにして分配し、これを疼痛時服用するように指示した。

結果

効果および副作用について表1, 2, 3, 4のごとき結果を得た。

考按

クロールプロマジンは1950年フランスにおいて合成され、交感神経の強力な遮断作用、鎮静作

表1 コントミン使用例の効果

		例数	有 効	無 効
投与量	1錠(12.5mg)	43	16	27
	2錠(25mg)	18	8	10
計		61	24(39.3%)	37(60.7%)

表2 コントミン使用例の副作用 (61例)

種 類	例 数	種 類	例 数
唾 気	16	頭 痛	1
眩 暈	2	疼痛増強	1
悪 心	1	計	21(34.4%)

表3 アトラキシン使用例の効果

		例数	有 効	無 効
投与量	2錠(400mg)	25	7	18
	4錠(800mg)	11	2	9
計		36	9(25%)	27(75%)

Hatsumi IWASAKI, Haruko YOSHIOKA, Yuriko TERADA & Yoko MAKITA (Department of Gynecology and Obstetrics, Tokyo Women's Medical College): The use of chlorpromazine and Tranquilizer for dysmenorrhea.

表4 アトラキシン使用例の副作用 (36例)

種	類	例	数
悪寒戦慄, 発熱, 紅熱様発疹		1	
悪	寒	1	
計		2	(5.4%)

用, 代謝抑制作用を有し, トランキライザーは同年ルードウィッヒ, ピーチにより米国において合成され中枢神経内遮断作用を有し, 筋弛緩, 脳に対する鎮静作用を有するものである。

両者ともに近年かなり広範囲に各科領域において使用され, その報告も枚挙にいとまもないほどである。産婦人科領域においても, 無痛分娩, 子癇妊娠悪阻等に用いられ, 良好な効果を挙げているが, 月経困難症に対し使用した報告例はきわめて少なく, クロールプロマジンでは田代氏¹⁾, Chamblin W.D.²⁾らの報告例, トランキライザーでは増岡³⁾, 田淵⁴⁾氏らの報告例等数例を数えるにすぎない。

月経困難症の発生機序, 原因は一元的なものではなく, したがってこれの治療法もそれぞれに応じ適当な治療法が選ばなければその効果は期待できない。

現今までに行われてきた治療法は, ホルモン療法, 理学的療法, 生活様式の変化, 更に手術的療法, 脳下垂体あるいは間脳, 甲状腺のレントゲン照射等であるが, 一方根本的治療法とはなり得ないが, 神経感受性昂進を緩和する目的で種々の薬物療法が行われている。爾来, 種々の鎮痛剤, パパペリン, ピラミドン, ルミナル, フェナセチン, アスピリン, 塩酸プロダリン等が用いられて来た。

最近クロールプロマジン及びトランキライザーが各科領域において鎮痛鎮静に用いられ, 良成績を得ているので, これを月経時疼痛に応用せんと試みた。

月経痛の原因について精密な検査を行い, それぞれに適當なる治療をすべきであるが, 本校学生の場合には大多数のものが原発生機能性月経困難と認められるので, ただ問診によつて程度をきめ, クロールプロマジンおよびトランキライザーを与え, その効果を観察した。また精神的治療に対する暗示を避けるために, 薬品名とその効果不明

の点を明示しておいた。

コントミン服用者名中 効果のあつた者は24名で, その有効率は39.3%, アトラキシン服用者36名中効果のあつた者は9名で, その有効率は25%であつた。

田代氏等は月経痛を有する者60名についてその程度の軽重にかかわらず, コントミン (12.5mg) 1回2錠, 1日1~2回用いてその効果を観察しているが, 軽度の者では1回1~2錠, 1日1回, 障碍のひどい者は1回2錠, 1日1~2回与えて相当の効果が期待できると報告している。Chamblin W. D. 等によれば, 48名の原発性月経障害を有する看護学院の生徒を対象として, これにクロールプロマジンおよび他の鎮静剤を与えて両者の効果を比較し, クロールプロマジンの有効率は約40%で, 他の鎮静剤と効果はほとんど同程度であり, クロールプロマジンと他の鎮静剤とを混用すれば, 非常に有効であると述べ, とくにクロールプロマジンは月経時疼痛に悪心嘔吐を伴うものに対して制吐作用があると述べている。

また田淵氏は月経前緊張症5例にアトラキシンを用い, 5例とも有効であつたと報告し, 増岡氏は月経痛を有する者4例にアトラキシンを用い, 3例に有効で1例は無効であつたと報告している。

これ等の報告例では, コントミン, アトラキシンは月経時疼痛に対して相当の有効率を認めているのに比し, 当教室の実験結果は相当低率である。医学生などの知識階級の者では相当批判的であるために, 月経時疼痛に対してクロールプロマジン及びトランキライザーの有効率が他に比して低いのではないかと考える。

コントミンの副作用については, 催眠傾向, 眩暈, 口渴, 血圧下降, 心悸亢進, 全身倦怠等が多く報告されているが, 当教室においても睡気最も多く16例を数えている。野嶽氏⁵⁾によれば, 外来患者の治療に際して催眠傾向と起立性低血圧については注意しなければならないが, その他の副作用についてはあまり苦痛とならないと述べている。学生, 勤務者等の月経困難症にコントミンを用いる場合には, 睡気等の副作用は好ましくないと考えられる。また Owen の無顆粒細胞症の死亡例, Winkelman 等の精神病患者の長期投与例に認めた黄疽発生のごとき重症例の報告がある

が、我々の実験の如くコントミン使用量の少ない場合はそのような重症な副作用に対する憂慮の必要はないと考えられる。

つぎにアトラキシンの副作用については、胃障害、眩暈、全身倦怠、肝障害、下痢、時に重篤なアレルギーの報告が認められるが、多くの人は何ら副作用はないと報告している。当教室の実験においても94.6%は何ら副作用を認めなかつたが、2例中1例に悪寒戦慄、発熱、猩紅熱様発疹の重症症状を呈し、1例に悪寒を感じている。重症例に対しては、ブドウ糖、グロンサン、メチオニン、抗ヒスタミン剤を用いて軽快した。副作用が少ないといわれるアトラキシンのにおいても、かかる重症例が認められたことは使用に際して注意すべきことと考えられる。

結 論

東京女子医大学生245名中、月経時疼痛を有する87名を対象とし、コントミンおよびアトラキシンの月経時疼痛に対する効果を観察し、コント

ミンでは39.3%有効、アトラキシンの場合は25.0%有効であり、コントミンでは睡気その他の副作用を認め、アトラキシンの場合は大部分に副作用を認めなかつたが、重症症状を呈する者1名を認めるという結果を得たので、ここに報告した。

擱筆するにあたり、御懇篤なる御指導、御校閲を賜つた柚木教授に深く感謝いたします。

引用文献

- 1) 田代仁男・内田敬久：通信医学，8 (13) 1068 (1956)
- 2) Cham lin, W.D.: Am. J. Obst. & Gynec., 74 (2) 419 (1957)
- 3) 増岡陸浪；アトラキシンの文献集 No.1 28 (1957)
- 4) 田淵 昭・村上英子：産と婦 25 (2) 108 (1958)
- 5) 野嶽幸雄・田村昭蔵：コントミンの文献集 No.3 92 (1958)